

詩

石内秀典
尾崎与里子
山本英子
選

特選

枇杷

南川瀬町

谷 敏子

積木を並べたような
色とりどりの家が建ち並ぶ中に
大木の枇杷の木に抱かれるように
或いはその木を抱くように
間口一間ばかりの古い茅葺きの
家が建っている
破れトタンをさしかけた軒先に
大根 人参 玉葱が吊り下げられている
口を引き結んだ姿が
老いた猿のように曲げた四本の指を
床について立ちあがると
痩せた両腕を漕ぐようにして
僅かな夜食をととのえて

どこで暮らしているのやら
いつ帰ってくるのやら
分からない息子を待っている

雨が降っている

細い雨が

くらい空から降り続くと

枇杷の実

闇のとぼりの内側から

幽かに明るみつつ

人知れずに熟れその甘露が

小面と変じた婆の口元に

ほとほとと 滴り

吸いこまれていったのですよ

二つ 三つもぎとって

夕餉の卓袱台にのせたのです

枇杷の木はゆうべ

あとかたもなく焼けてしまった

ことしようやく明かりを灯した

枇杷の実は一晩にして

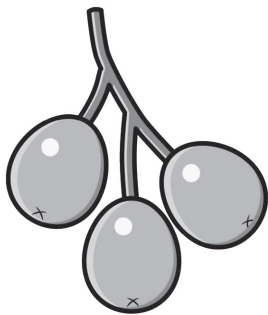
茅葺きの小屋を

朱に染め上げ

華とはじけたのだ

(評)

一本の枇杷の大木に包まれた陋屋で行方知れずの息子を待つ老姿の日常が謎めいて魅力的に描写されています。枇杷の肉感のみずみずしさごとそれらを一夜の火事で炎上させる達者さ、お見事です。



特選

えのころ草

西今町
谷口明美

どこから迷い込んだのか
通りぎわのわずかな土だまりに
揺れる 数本のえのころ草
人待ち顔のわたしに
お茶目に問いかけてくる

玩具も文具さえもなかった
子どものころ
腕白っ子やすましっ子の首すじに
ネコジャラシして
とっさに逃げた
大好きな先生の背後を
ケムジャラ穂先でくすぐり
コラツとばかり
追っかけられるのが
ふしぎに楽しかったよ

ときには
大きく揺れながら
きわどい失敗ごとや
だれにも伝えたことのない

あの秘密まで
聞き出そうとするのだが
けっして応えない

きょうも
同じ仕草 同じ声で
可愛く揺れながら
しきりに なにかを
探ろうとしている
風は後ろ顔に走りぬける

(評)
えのころ草に対して遠い日のなつかしい友だちのように向きあっています、楽しい事だけでなく、懐かしさの中に潜む失敗や秘密に至る興行きを三連目で静かに作り出しています。

特選

ぜいたく煮

西今町
やまかみ まさよ

さあ これからあなたの
グチをきいてあげるよ

漬け物桶から出てきたひねぐきは
愛用のまな板の上で ゆったりねそべる

かつて
突然のかなしみ事がおこった時
隣近所が寄り合い 晩餐の会席で
みんなのお口直しや箸休めにと
ひと役買って出たもんだ

退屈ないちにちを輪切りに
研ぎ澄ました包丁で うすく幾枚にも刻み
やがて居心地良いほどの塩ぬきがはじまり
胸の内のグチや他愛ないうわさ話も
じんわり浸み出る だし汁の中

近頃めっぽう歯ぐきが弱り
噛みきるのもひと苦労なとき
ぐつぐつ ことごと 煮込んでいると
ふと懐かしく思い出してしまふ
疎遠になつてしまった故郷のこと

(評)
「ひねぐき」の存在感が田舎のしたたかな生活を彷彿とさせます。そのままでも充分美味しい物にもうひと手間加える、そんな味わい深い人生の日々に来たことへの開き直りを装った秘かな賛歌。

※(ひねぐき：古たくあん)

入選

時を経て 今なお

古沢町

真野 美栄子

中学生になった時

七つ年の離れた兄が「頑張れ!!」と
買ってくれた『国語辞典』

何万 イヤ何十万回 ひらいただろう

私にとって 一番の愛読本

表紙は すっかりくずれ

中も ところどころ擦り減り 手あか汚れ

二ミリ角に満たない

小さな活字が びっしり並んでいる

たくさんの意味 読み方等を教わってきた

だが いつの頃からか

拡大鏡を使っても 見辛く

大きな活字のは ないか 探し歩き

やっとな見つけた『日本語 大字典』

出番を取って代わられ

頻繁に入れられる様を

今は 二代目と認めてくれたように

悠然と 本棚の定位置で じっと見ている

時おり 手招きされた錯覚におちいり

思わず手がのび 自然とペーじを繰る

もはや 点にしか見えない活字を

いとおしく ながめているうちに

もらった うれしさを

飛び回って表現している オカッパ頭が

「使っているな」にこっと笑って

のぞき込んでくれる 兄が

浮かびあがってくる

「スマホ持ちながら 時代遅れやで…」

息子に いつも失笑されつつ

文字を追う時 明るさ求め

二代目の 大字典とともに動く

手で 目で 十二分に調べ

味わえる安心感 格別

時を経ても 色あせぬ醍醐味は 兄から

(評)

分かりやすい平易な書き方で、人と人、
人と物との間に通う暖かい時間の「愛」
が見事に描かれています。

入選

泥中の蓮

南川瀬町

横谷 沙 智

守るべきものなど何もなかった頃は

無慈悲に破片をばらまいて街を傷つけていた

硝子の涙を流す人がいるのに気付かずに

坂道を転がり落ちるように罪を重ねても

愛だけはいつも手を差し伸べてくれていた

悲しみの吐息に口づけの雨を降らせたら

君を抱き寄せて二人でひとつの傘になろう

泥流と愚かに戯れながら生きてきたけれど

そこで蓮は美しく蕾むと教えてくれたから

誰もが心を重ね着て鎧うけれど

君が臆する事なくさらけ出してくれた素肌の

透き通るような白さから目を反らせずにいた

真実にも嘘にもなりきれない半端な僕は
揺るぎない清らかさに触れて愛を知った

入選

一陽来復

野瀬町
水沢

郁

かきもち溜めで
孤高風情だったハクモクレンは
きょう
赤子の新芽を突き立てている
まっすぐ
空に

悲しみの雨がやむのを二人で見届けたら
僕は君を照らすひとしずくの光になろう
泥流を愚かに漂いながら生きてきたけれど
そこで蓮は美しく咲くと教えてくれたから

(評)

「破片をばらまいて街を傷つけるや、硝子の涙」といった鋭い感覚が散りばめられた表現に惹かれますが、言葉が自身の現実から離れてきれいに浮遊しすぎるのが惜しいです。

入り日は熾火
ふくれひねくれのけぞった
火鉢の網の上

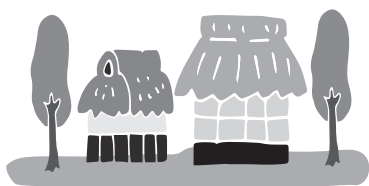
祖母作り置きのかきもち
ブリキの一斗缶から取り出して
二三枚まとめて折れば
頸椎や肩甲骨が剥がれるように
バリバリ硬く重なり合い
香ばしいカケラが弾けたことだった

庭一面

焦げ茶のかきもち
カサカサ音立てて壊す
澄んだ音はカッターナイフ
年の瀬の乾いた空気切り裂く高速船
千里も伝っていきそう
人騒がせだと思
掃きまとめておいたら

(評)

何でもない日常の中に未来へ兆すものを感じたことで、日常の色、音、匂いがひとつずつ立ち上がってきて、シンプルな表現の中の豊穣を感じさせます。



入選

雲になったノンちゃん

芹橋一丁目
楠 亀 美恵子

眩しいほどの 一面の青い空
伊吹山のでっぺんに
微かな雲がふんわり
まるで雪が被る 滋賀の富士山

芹川の散歩道を心弾ませゆつくりと歩く
すると、どこからか呼ぶ声がある

「母さん〜 母さん〜」
後ろを振り向いてみるが

立ち止まり 辺りを見渡すも
犬と散歩する少女がいるだけ
水仙の群生 黄色いタンポポ

もう一度

「母さん〜 母さん〜 母さん〜」
ノンちゃんの声だ!

忘れるはずのない 娘の声だ
何処にいるの?

見えない姿を 追い求め
遠くを見渡すと

伊吹山のふんわり雲が

ノンちゃんの顔に…

「こつちに、戻っておいでよ!」

手をかざすと

ふんわり雲は 遠くへと離れていく

精一杯伸ばした手には

一輪の桜の花びらがのっけている

昨年は一緒に見たよね 綺麗な桜を

こぼれる涙を消すように

もう一度空を見上げて見れば

眩しい雲一つない青空が

キラキラ輝いている

天に召されたノンちゃんに

「母さんは 今日精一杯前を向いて

歩いているよ!」

優しくホホを撫ぜる心地よい風が

通り過ぎる

(評)

その死から一年。強いかなしみを越えて
の素直な表現が、亡くなったノンちゃんへ
の作者の思いを深く読者に共感させます。

佳作

お家の中でお花見

岡 町
宮地 正子

佳作

届け想い、どこにいても

犬上郡豊郷町
藤 田 始 宏

佳作

夏の訪れ

日 夏 町
上 杉 隆 一

佳作

空を食む

東近江市
前 川 利 孝

佳作

円卓

正法寺町

高井

豊

佳作

十月桜

彦富町

池田光

雄

《総評》

一冊の詩集が送られてきました。(ごくごくたまにありますが)「虚仮一心」読み方も意味もわかりませんがそのままお礼状をと向きあいました。未知の作者は七十七歳。二十歳の日から五十七年、詩ごと日常を暮らしてきて、これが七冊目、詩には体あたりの一冊で、巻末にルビがありました。『こけのいつしん』
 「虚仮も一心——愚者も一心に仕事をすればすぐれた事ができるの意——」と広辞苑にありました。意味を少々変えて納得しました。誰でも一心に歩いてゆけばいい。世の評価を求めたければ求めて、そうでなければそういうものから遠く、ただ行けばいい。よろめいても休み休みでもすぐれた事はできなくても、詩を書く者は詩を書く道を——と。
 今回、二十六篇の作品を拝読しながらひときわ、作品の向こうの作者に、その存在その日々その来し方に向き合わせていただいている思いが強くなりました。投稿された十九名の方々からしみじみとした充足感をいただきました。

山本英子

選者詩

汀にて

石内秀典

名付ける者の
 いない場所では
 もはや風とは言わない
 木枯らしが
 海へ吹き抜けていった後
 そこから走る様を
 なんと
 呼ぶのか

陸から海へとなだれ落ちる
 その汀を越えると
 木枯らしは
 風ではない

木枯らしは帰って行つたと
 汀から
 きびすを返して
 深い喪失の砂を
 渉る私に
 去って行つたものは
 何を語る

日は中天
 私は影である

殺意

尾崎 与里子

翔ばない蛾の

青い鱗粉におおわれた部屋で

今日も私は

パリンとお煎餅をかじる

たいくつな部屋は

いつまでも溶けずに

口中に漂って

鱗粉が

呼吸器の深いところへ届いているのが

分かる

昨日出かけた山は

ミツマタにおおわれていた

ミツマタだけが咲いている山

私は山を登りながら ヤッホーと言った

何人もの人が振り返り

音楽のように

黄色いミツマタの群生が流れあふれた

ミツマタ以外の命を食べつくした野鹿の群は

どこへ行きつくのか

子孫が増え続け

あまりに不均衡な場所になっても

種は

どうしようもなく持っている強い殺意で
匂やかに うなだれるように
燃えたっていく

純白の椅子

山本英子

ひる

父の部屋に入り

画集の中の一冊の

その中の一枚から

何故か立ち去れなかった幾日もの

ある日

〈その絵が好きなのかい〉

不意の声にふり返り

帰ってきていた父に

頬に血をのぼらせながら

私は画集を閉じると

かたぐうつむいた

その絵が好きだったのではない

裸婦像だったのでもない

ただ私は その絵には

本当はだれかいないければいけない人がいて

けれどその人は二度と帰ってこないと思った
のだ

その絵はたしかに父の画集にあった

けれどその日以後

どの画集のどのページを開いても

私はその絵をみつけることができなかった

私はその絵が好きだったのではない

その絵が忘れられないのでもない

開けた窓から風のくる午後

好きな秋色のカーディガンをはおり

香りたつカップを手を

ふと上げた目の前の額縁の中で

その絵は燃えていた

私はその絵が好きではない

その絵には

決して帰ってこない人が

純白の椅子に座っている